

# 「光」と「闇」をめぐる「循環小数」

— 小林多喜二・櫛田民蔵・ストリンドベリ・バルビュス —

尾西 康 充

## 1 「闇があるから光がある」

「闇があるから光がある」／そして闇から出てきた人こそ、一番ほんとうに光の有難さが分るんだ——この小林多喜二の言葉は、小樽入舟町のやまき屋という小料理屋で酌婦をしていた田口タキに宛てた一九二五年三月二日の書簡の冒頭に使われたものである。北海道拓殖銀行小樽支店に勤務していた多喜二はタキの境遇を案じながら、「不幸というのが片方にあるから、幸福つものがある。そこを忘れないでくれ。だから、俺たちが本当にいゝ生活をしようと思うなら、うんと苦しいことを味つてみなければならぬ」と、ともに生きていることをたしかめ合い、たとえ今は「闇」のなかにあるうとも「光」のあることを信じて生きるように激励する。小樽郊外の高島郡高島村で生まれたタキは、商売に失敗した父親玉蔵によって本人の知らないまま室蘭の銘酒屋に売られ、一九二三年二月一七日玉蔵が若竹町踏切で鉄道自殺をすると、死後四カ月目に室蘭から転売されてきた。手塚英孝氏によれば、多喜二より五歳下のタキ

は多喜二と出会った当時一七歳、「不幸にひしがれた内攻的かつましきのなかに、のろわれた生活からのがれようとする必死の願いをひめていた」女性とされ、小樽では「そば屋」と呼ばれるやまき屋のような「曖昧屋」に足を踏み入れた多喜二はそれまで自分の知らなかった暗い世界を知ることになる。「非人間的な生活をしいられていてそこで働く女たちの世界を、知れば知るほど、それは彼にふかい感慨をあたえるものであった。そして、このみじめな境遇から、のがれようとして絶望的な苦しみにもだえている田口の姿は、やがて彼をとらえてはなさないものとなった」という(1)。手塚氏が切実な多喜二の気持ちの確に描いたように、多喜二は「光」のあることを信じて——多喜二自身も銀行員として厚遇された生活に甘んじることなく——東京商科大学を受験して自己を高めようとする希望を持って生きていた。「光」と「闇」をめぐる多喜二の思考は、田口タキを若竹町一八番地の自宅に住まわせるようになってから一九二六年五月二九日の日記に「自分の人生観の暗さと、そ

の暗から何等かの明るさを求めようとする気持の焦燥（四を三で割って行つて、一、三三三……となる時、丁度何時かそうして行つたら、四でも立つ時が来ないか、と思う、それ！）があるとすると記述や、六月一日の日記に「ある境地がある、そこへは Brighten thought かひや、Darken thought から行く「両方」の道がある」という表現にみられ、闇があるから光があるのか、あるいは（光があるから闇があるのか）は、いつまで経つても割り切れない「循環小教」のようだと言われている。多喜二がプロレタリア作家として出発する起点となつたこのような思考は、何に影響されて深められたものであつたのか、同時代のいくつかの言説をとりあげて考察してみよう。

## 2 河上肇と榊田民蔵

小樽商科大学附属図書館には、多喜二の個人蔵書九三点（和書九〇冊、和雑誌三種）、家族の蔵書一〇〇点（和書七九冊、和雑誌二二種）、その他二二点（写真アルバム他）が所蔵されている。多喜二の個人蔵書として『近代劇全集』（第一書房）や『近代劇大系』（近代劇大系刊行会）などの外国戯曲集のほか、福田徳三の『経済学講義』（『経済学全集』第一集、一九二五年三月、同文館）や『経済原論 河上博士講述 大正十二年度』という経済学の専門書が含まれている。『河上肇全集』別巻（一九八六年五月、岩波書店）著作年表によれば、この『経済原論』には四種類の異本があるとされるのだが、いずれも河

上本人の校閲を経ないまま河上が講述した内容を三分冊にまとめて京都経済哲学研究会（代表佐藤哲治）が発行したもので、刊行年月日の記載がなく非売品であつた。河上の『経済原論』は、多喜二が一九二一年から二四年まで小樽高等商業学校で学んだときに使用したテキストであつたと思われ、倉田稔氏によれば、小樽高商の「若い経済学関係の教師たちは、彼らの多くが一橋で学んだ福田徳三の学風のほかに、流入しつゝあつたマルクス主義経済学を背景としての河上肇、榊田民蔵などの学問の影響のもとにあつた」という（2）。多喜二の個人蔵書には、表紙に「第参卷（下）」と鉛筆書きされ、内容は第三編分配に当たる。一九二二年四月から二三年六月まで小樽高商で教鞭をふるつた大熊信行は、病氣療養のための休職をした後二五年三月に退職する。多喜二が二年生に進級した一九二二年に経済原論の講義を担当していたが、担当年度を考へても学説の性質からもみても大熊は河上の講義録をテキストに使つたとは思えない。大熊の回想によれば、多喜二は経済原論の授業で「こんなことでもおれはやればできるのだ」といわんばかりに「中途退場」したことがあつたという（3）。倉田氏は多喜二の級友福田勇一郎に取材し、資料提供のみならず実際に乗船しての直接調査など「蟹工船」執筆に全面的に協力することになる乗富道夫と多喜二と福田との三人が高商前の地獄坂を下つていたとき、多喜二がマルクスの顔を尋ねたので、坂の途中から図書館に引き返し、河上の『貧乏物語』（一九一七年三月、弘文堂書房）を

借りてマルクスの写真をみせたことがあつた、というエピソードを福田から聞き出している(4)。

「驚くべきは現時の文明国に於ける多数人の貧乏である」と書き出される『貧乏物語』は、「大阪朝日新聞」に五三回連載(一九一六年九月二日〜二月二六日)した内容を単行本として出版され、「如何に多数の人が貧乏して居る乎」(上編)「何故に多数の人が貧乏して居る乎」(中編)「如何にして貧乏を根治し得べき乎」(下編)という三編から構成されている。潔癖ともいえる河上の倫理観もとづいて執筆された『貧乏物語』は、第一次世界大戦に際して輸出関連企業はもとより海運業や造船業などが好況に沸いて経済が急成長し、多くの成金が生まれた反面、物価高騰のために貧民層を急増させていた日本社会において、出版と同じ年にロシア革命が勃発したこともあつて空前のベストセラーになつていた。しかし同書のなかで河上は「思ふに吾々の今問題にして居る貧乏の根絶と云ふが如きことも、若し社会の凡ての人々が其心掛を一変し得るならば、社会組織は全然今日のまゝにして置いても、問題は直ぐにも解決されて仕舞ふのである。其心掛とは、各個人が無用の贅沢を已めると云ふ事只其れだけの事である」という結論を提示した。

人道主義的な社会改良に止まつていた河上の学説に対して根本的な批判をおこなつたのは、彼の弟子であつた榎田民蔵であつた。榎田の代表的論文「社会主義は闇に面するか光に面するか」河上博士著『資本主義経済学』の史的発展』に関する「感想」

(「改造」第一四卷第七号、一九二四年七月)は、『資本主義経済学』の史的発展(一九二三年八月、弘文堂書房)を批判の対象にしていた。河上によれば、「個人主義の社会組織のもとではその道徳原理のうへで当然利己主義が是認せられ、社会全体の繁栄は、その成員がおのおの自己の利益を計るという前提のもとにはじめてなしとげうるもの」であるから、「各個人が経済上において遺憾なく自己の利益を追求すれば、そのことは期せずして社会全体の経済的繁栄をもたらすにいたる」。このような「利己心是認の道徳原理」は資本主義経済学のうへに「反射」して資本主義経済学のための指導原理となつている。経済学の発展をもたらしてきた道徳論や哲学論は「なんらかの奥義として天才の体得するもの」とされ、「天才」は「一子相伝の方法において相続継承」するものという。

しかし榎田によれば、このような河上の主張は「階級支配のもとにおける特権階級の最高の代表者」である「一般的抽象的天才」の存在を前提とする「人道史観」でしかなく、「時代における生産力の発達およびそれより必然的に発生する生産関係」によつて「階級意識やそれより発生する諸政策」が決定されると考へる「唯物史観」とは別物である。河上はマルクス主義者を自任しているが、実はそれを理解できていない。「社会主義は闇に生まれるがゆえにのみ光を産むのであつて、光に面するがゆえに光を産むのではない。むしろそのより多く闇に面するによつてより多く光に面することができると主張する」と主張する。

大内兵衛によれば、河上の学説を真正面から批判した榊田という人物に関して、日本資本主義論争では「講座派の人々はもとより世間の人々は彼を労農派の理論家と分類したが彼自身はそういうセクト性を全く認めなかった」という(5)。

榊田からの批判を受けた河上は、榊田の言葉に従ってマルクス主義研究を深化発展させることを決意し、経済学原論の講義ノートも「大正一・二年度版」では第一編「生産」第二編「交換」第三編「分配」という構成であったのを、「大正一四年度の講義プリント」では第一編「資本ノ生産過程」第二編「資本ノ流通過程」第三編「資本ノ総過程」という『資本論』体系に準拠したものに書き換えられたのであった(6)。多喜二が持っていた講義ノートは、榊田による批判以前に執筆されていた「大正一・二年度版」で、内容は第三編「分配」に当たる部分であった。多喜二は一九二七年三月二日の日記に「マルクスの『資本論』を読み出している。そのデリケートな、科学的頭脳にはホドく感心してしまった。カール・カウツキーのものや、河上肇、高島素之氏のものなどをそばに置いて、やつてゆく積りだ」と認めている。さらに河上は福本和夫からの批判を受けて雑誌「社会問題研究」第七七〜八三、八五、八七、八八冊(一九二七年二〜四、六〜八月(八月は五、一五二冊刊行)、二八年六、一〇、一一月)に「唯物史観に関する自己清算」を一〇回連載する。第一〜三回までは「従来発表せし見解の誤謬を正し、かねて福本和夫氏の批評に答ふ」というサブタイトルが付され、第

一回から第三回までは三木清の現象学的解釈学に近い立場から自己批判し、第四回から第七回まではレーニン『唯物論と経験批判論』に依拠しながら福本への反論をおこなった(7)。多喜二は一九二七年四月一〇日の日記に、福本和夫の「社会の構成並びに変革の過程」、「経済学批判の方法論」という論文のタイトルをあげ、前書には「読了」、「全部唯物的弁証法的に述べられている。非常に感激した最初の本」と読後感を記す一方、「河上肇」**「社会問題研究」**(唯物史観の自己清算) 平明で、いよ。**「福本につかれて、自己清算を一生懸命やっている。」**／**唯物論的弁証法**の核心を捕えようと思う」と認めている。

榊田が大山郁夫とともに公開講義のために小樽高商を訪れたのは、小樽高等商業学校編纂部によつて創刊された「緑丘」第一号(一九二五年六月五日)および第二号(七月一日)に、大山の講演録「社会科学の人生価値」が連載されていたことから、一九二五年四、五月頃であったと思われる。彼らの講演を聴講した手嶋恒二郎によれば、「私は資本論をいままでに五十三回も読みかえました、という言い出しにはじまった、いかに榊田さんらしい淡々とした話しぶりは、恰も資本論の研究等が多くの人びとの間で熱心に進められていた、そうした折であっただけにそれを聴くみんなに対しては、大山先生以上の深い印象と収穫とを与えたようであった」という(8)。多喜二は前年の二四年三月に小樽高商を卒業しているので、学生として講演会に出席することはなかったが、大山と榊田の来学には強い

関心を持っていたにちがいない。ちなみに講演会と同じ二五年の一〇月には小樽高商で軍事教練反対運動が展開することになった。

### 3 ストリンドベリ「ダマスクスへ」

多喜二は一九二六年六月七日の日記に「この世の生活実事を考え、体験してきたら、矢張りこの世の中を見る態度が色々に分れる。人生はついに循環小數の中から出れない。闇があるから光がある、そして人は闇と光の中をグル／＼廻つて歩いてゐる、四を三で割つて行つて、恰かも四が何時か立たないかと望んでいるかのように」と記している。すでに述べたように、この年の四月末に田口タキを若竹町一八番地の自宅に住まわせるようになっており、「析々帳」と名付けられた多喜一の日記には、タキの手紙箱にほかの男性からの手紙が入っていたためにタキに「疑惑」を抱いたことや、「支那料理屋」で「綺麗な女」に「自分だけが、殊のホカもてた」ことから「男の不思議な「不貞」」を反省するものの「ナオそのフザけることをやめることの出来ない、不思議な気持」を味わい、「タキ子の前の生活に於て、彼女も亦（あんなに自分に誓つたのに）色々な男にあゝしてひかれたんではないか」という疑いを強めたことなどが認められている（五月二九日）。

六月七日の日記には、アンリ・バルビュスの言葉として、この世では「悲哀は歡喜と同じく絶対である」ことが真理である

という一節が引用され、もしこの主張に従えば「真理を有するということとは悲哀を變じない」ことになる」とし、多喜二はバルビュスの考えに対して懐疑的な見解を示したうえで、つぎのよなヨハン・アウグスト・ストリンドベリの戯曲に登場するセリフを引用する。なお多喜二はこの作家の名前をストリンドベルクと表記しているが、本稿では通用のストリンドベリと表記することにする。

「暗は何処から。」

「光そのものから……でなければ私は分らない。」

「それは多分ほんの影であつたのだ。なぜと云つて影には光がつきものだからね。しかし暗には光が必要でない」

「いつまで経つても切りがない、もうお止め」

この日の日記の末尾に「……何処迄続けて行つてもキリのないこの二つのもの……「ダマスクスへ」のあの光と闇の最後の会話が思い出せる」という言葉から分かるように、右のセリフは、スエーデンの作家ストリンドベリの長編戯曲「ダマスクスへ」最後の場面に登場する会話である。一九二六年一〇月二四日の日記で「ダマスクスへ」全編を二度通読したとし、「ズバ抜けて鋭い頭で、五十年間経験したことをスツカリ自分のものにしてしまつてからの、表現だ。まずこの事がくる。深い。こういうのを深い、というのだろう」と読後感を記している。スト

リンドベリ晩年の「ダマスクスへ」は第一・二編が一八九八年、第三編が一九〇一年に発表された大作で、主人公「知られぬ人」は、医師と結婚している「夫人」を自分のものにするが、愛と憎しみの相克する心理的葛藤に苦しまされる。第三編は、「知られぬ人」が山頂にある僧院での出家を目指し、聖なる儀式に参加する。愛慾地獄の起源をさかのぼろうとしたストリンドベリによれば、男性と女性が争い続けているのは、イブがアダムを誘惑して以来であるのだが、イブをそそのかした蛇は、そもそもだれが登場させたものであったのかを考えると、それは「最上のもの、唯一のもの、最後のもの、生活に価値を与へるもの」——すなわち神——であったという。悪は善から、闇は光から到来するという右の引用にみられる対話は、このようなストリンドベリが晩年に到達したキリスト教信仰に由来するものとされ、「いつまで経っても切りがない、もうお止め」というセリフは、全知全能の神の前では人間は無力な存在でしかなく、神に帰依することによってのみ人間に救済がもたらされることを意味している。この作品を翻訳した茅野蕭々によれば、「ダマスクスへ」が読者に伝えているのは「知識によつて世界を理解することの困難から信仰へ趨く経路であり、無常極まりなき人間の評価に煩はされない魂の発展を肯定することであり、女性によつての人生の救済を断念して神の支配に身心を委託し、罪惡の觀念から解脱すること」であった(9)。「いつまで経つても切りがない、もうお止め」というセリフの後、懺悔僧と僧たち

が行列をなして現れ、誘惑者は「左様なら」といつて隠れる。そしてこの戯曲の最後は、つぎのようなセリフで舞台の幕が下りる。

懺悔僧「大きな黒い棺布をもつて」主よ。永遠の休息を与

へたまへ」

合唱「又永遠の光もて照したまへ」、

誘惑者「よその人を棺布の中に包む」平和の中に休みまし  
た」

合唱「アーメン」

「ダマスクスへ」結末は、神の光のもとで人間は平安を享けるといふストリンドベリのメッセージを伝えているのである。

ところで多喜二は、どの邦訳を通じて「ダマスクスへ」を読んでいたのだろうか。本邦初訳となる山本有三訳は「白樺」第七卷第一〇号(一九一六年一〇月)と第八卷第四号(一九一七年四月)に掲載された(10)。楠山正雄訳は『ストリンドベルク戯曲全集』第三卷(一九二三年一月、新潮社)に収録、茅野蕭々訳は『ストリントベルク全集』第一卷(一九二四年三月、岩波書店)と『近代劇全集』第三卷北欧篇(一九二八年七月、第一書房)に収録された。小樽商科大学附属図書館には、多喜二の個人蔵書として『近代劇全集』が所蔵されているが、第一・一一・一二・一四・二五・四一巻の六冊があるだけで残念なが

ら第三巻は欠けている。多喜二が引用した言葉から推測して、多少表記に異同があるものの、多喜二が実際に読んでいたのは楠山訳『ストリンドベルク戯曲全集』第三巻であると思われる、右に引用した部分は同書（三九四〜三九五頁）にある。多喜二

は小樽高商の卒業論文としてストリンドベリを取り上げようとしたが、「純文学という理由で担任の教師に反対」されたため（11）、クロポトキン『パンの略取』第五章「食物」の邦訳に、イギリスの劇作家アルフレッド・スートロの戯曲「見捨てられた人」全訳を加え、「自己の態度と覚書」という序文を添えて提出した。担任の名前は根岸正一、卒業論文のタイトルは「見捨てられた人とパンの征服及びそれに対する附言」、序文の扉には「さうだ、此の世には一つの神が存在する。／吾々の広大な内の生命を導引くためには、／また、全人類の生命のうちに含まれてゐる分担を導引くためには、／決してそれから眼を外らしてはならない一つの神が存在する。／真理といふ神だ」というバルビュスの「クラルテ」結末の言葉が引用されていた。卒業論文で取り上げることができなかったものの多喜二はストリンドベリの研究を継続し、一九二四年一〇月一四日評論「ユリイ嬢にあらわれたストリンドベルクの思想とその態度」を完成させた。ところが「十三の南京玉——あぐらをかいての話——」（小樽新聞）一九二七年五月三〇日）によれば「此頃になつて、ストリンドベルクの経済思想、社会思想及びそれを貫いている方法（メトード）が実にたわいもない反動的なものであることが

分りかけて来た」とし、「プレハーノフの所謂芸術に於ける「客観的尺度——形式と観念の合致」から見て、自分があれ程崇拜し研究したストリンドベルクの偶像が自分の眼の前でガタ／＼と崩壊してゆく気がする」と告白している。

#### 4 バルビュス「地獄」「クラルテ」

多喜二は、支配欲や嫉妬心など田口タキに対する性的なとらわれから抜け出し、清浄な魂をもつてタキに向かい合おうとした。だがストリンドベリのように神への帰依によつて自己が救済されるという方向には進まなかつた。ストリンドベリの場合「光」は議論の余地なく絶対的なもので、神の「光」の絶対性を証明してみせ、神の愛が人間に恵まれることを示してみせるために「暗」——「光」が欠如した部分である「影」——が存在するとされる。それに比して多喜二の場合「闇があるから光がある」という言葉から感じられるのは、人間と社会を取り巻く「闇」の深さである。あくまでも「光があるから闇がある」のではなく「闇があるから光がある」のである。この認識はタキの生活に触れてみるによつて得た実感にもとづくものであるとともに、「闇から出てきた人こそ、一番ほんとうに光の有難さが分るんだ」という言葉は、タキに対する深い愛情に裏打ちされたものであつた。多喜二の一九二六年六月一日の日記には「三、四日、彼女の働き振りは素晴らしい。Mother がその事を自分に云つた、自分の事のように嬉しかった。こういう女

をストリンドベルクに見せて、安心させてやりたかった」とあって、二度の不幸な離婚体験にもとづく不信感に満ちたストリンドベリの女性観に支配された「ダマスクスへ」とはちがって、多喜二にはタキに対する絶大な信頼があった。

北海道拓殖銀行小樽支店に勤めはじめたのと同じ一九二四年四月、多喜二は島田正策や蔦田栄一、片岡亮一、斎藤次郎、新宮正辰、戸塚新太郎、宇野長作たちと同人雑誌「クラルテ」を創刊した。誌名は社会主義的な反戦運動をフランスでおこなっていたバルビュスの小説「クラルテ」からとられ、創刊号の扉には小説の結末で使われた言葉——卒業論文の序文の扉と同じもの——が引用されている。布野栄一氏によれば「恐らく小説『クラルテ』の英訳本からの重訳と思われるその一節」を多喜二が掲載したとされるが（12）、小牧近江・佐々木孝丸訳から同じ作品結末の部分を用いると「神は存在しない……然し否。此の世にはたった一つの神が存在する。人類がその生を正当に導くためには、この秩序を秩序であらしめるためには、断じてそれから目を外してはならない神が存在する。それは真理と呼ぶ神である！」という言葉であった。第一次世界大戦に志願兵として従軍し、戦場の非人間性を否応なく目撃させられたバルビュスは神の光ではなく自然の光、すなわち近代合理主義によって社会の悪や不条理を解決することを信じ、科学的社会主義にもとづくインターナショナルリズムを鼓吹して「世界的共生国」の到来を予言した。多喜二はこの考えに賛意を示し、バルビュ

スの「地獄」（一九〇八年）に登場する「悲哀は歓喜と同じく絶対である」という言葉を引用したのであった。

「地獄」（一九〇八年）では、銀行員になろうとしてパリにやってきた三〇歳男性は、自分が宿泊している素人下宿屋の部屋の壁に割れ目があることに気づき、隣室を覗くようになる。さまざま人間によって練り広げられる情痴の世界が目撃されるなかで、ほかの男性と不倫をしていたエエメという名前の女性が「私は今こんなにしてこんな苦しいんであるんですから」というと、彼女の夫は「苦惱、それは重大な言葉だ！ それは明かにわれ／＼をこの偉大な法則の前に導くのだ。その法則によれば、幸福は目的物でなければ、数字から割り出したものでもない。幸福といふものは不幸から生れ、全然不幸に纏まとひついてゐるもので、光と闇が離せないやうに、歓喜と苦痛とは分離することの出来ないものだ。人間からこの二つを離さうとすれば、両方とも一緒にしょなくなつてしまふのだ」と応える。この作品の訳者である田辺貞之助によれば「バルビュスは人間の悲惨と孤独とを極めて抒情的に剔抉したのち、それがどうしても脱却しえない宿命ならば——神を信ぜざるがゆえに——あるがままの姿において幸福を求めなければならぬとし、闇が光をあらしめるように、地獄が天国をあらしめると説き、人間苦の肯定の上に人間の偉大を打ち立てる」という（13）。多喜二は「バルビュスは、光と闇の存在を絶対と見たけれど、「もうお止め、いつまで経つても切りがない」と云っていない。こゝにストリン

ドベルクとバルビュスとの「時代の差」か「思想の差」か、「実際の方面に対する態度の差」かである」とし、バルビュスに共感を抱いている（一九二六年六月七日日記）。一九一九年社会主義的な反戦運動であるクラルテ運動をはじめ、二三年フランス共産党に入党してプロレタリア文学運動を展開しようとしたバルビュスの生き方は、多喜二が目指していたものに重なるといえよう。多喜二はマルクス主義の理想、櫛田の言葉でいえば「社会主義は闇に生まれるがゆえにのみ光を産むのであって、光に面するがゆえに光を産むのではない。むしろそのより、多く闇に面するによってより多く光に面することができるのである」という、「闇」のなかから「闇」を克服して「光」を放とうとする社会的実践の道を選んだのである。

多喜二は「十三の南京玉」のなかで「そう云えば、シツ面倒臭い議論よりは、まず！（まず、である。）あの「淫売婦」や「セメント樽」によって無産階級意識を（頭からではなく）胸から把握した人達が素晴らしく多いのを知って、そうかと思つた」と認めている。葉山嘉樹の名作「淫売婦」（「文芸戦線」第二巻第一号、一九二五年一月）と「セメント樽」の中の手紙（「文芸戦線」第三巻第一号、一九二六年一月）に触れながら、「頭」からではなく「胸」から「無産階級意識」を把握する人たちが多いことに感嘆している。多喜二が目指したプロレタリア文学も、理屈ではなく共感に根差した作品の創作を基本にしていたといえよう。

## 註

引用した本文に関して、「ダマスクスへ」は楠山正雄訳『ストリンドベルク戯曲全集』第三巻（一九二三年一月、新潮社）、「クラルテ」は近江小牧・佐々木孝丸訳『クラルテ』（一九二三年四月、叢文閣）、「地獄」は小牧近江訳『世界文学全集』第三巻「現代仏蘭西小説集」（一九二九年三月、新潮社）に拠った。

- (1) 手塚英孝『小林多喜二』上（一九七〇年七月、新日本出版社、一〇〇—一〇一頁）
- (2) 倉田稔『小林多喜二伝』（二〇〇三年二月、論創社、一四六頁）
- (3) 大熊信行『文学的回想』（一九七七年一月、第三文明社、二一五頁）
- (4) 前掲(2)と同じ、二二四頁。
- (5) 大内兵衛『櫛田民蔵「『共産党宣言』の研究」補修』（一九七〇年一月、青木書店）、引用は『大内兵衛著作集』第一巻（一九七五年一月、岩波書店、二五〇頁）からおこなった。
- (6) 杉原四郎『河上肇と古典派経済学——「資本主義経済学の史的発展」を中心として』（「立命館経済学」第一九巻第六号、一九七二年二月、四七頁）
- (7) 『河上肇全集』別巻「年譜」（一九八六年五月、岩波書店、二四一頁）
- (8) 『ある情熱の記録——手嶋恒二郎伝』（一九八一年三月、保険研究所、八二—八三頁）
- (9) 『近代劇全集』第三巻北欧篇（一九二八年七月、第一書房、五四六—五四七頁）
- (10) 『図説翻訳文学総合事典』第三巻（二〇〇九年一月、大空社、

五一〇頁

(11) 前掲(1)と同じ、八九頁

(12) 布野栄一「解説」(『復刻版 クラルテ』一九九〇年七月、不二出版、四頁)

(13) 田辺貞之助「解説」(『地獄』、一九五四年九月、岩波書店、三五二頁)

「おにし・やすみつ 本学教員」